

五箇地区むらづくり推進協議会

1 基本データ

- 地区名 五箇地区
- 地区人口 65人
- 面積 146km²
- 地区の沿革

五箇地区は、市街地から約8km東南の位置にあり、西は「日本百名山」の「荒島岳」、東は赤兎山と白山連邦、岐阜県に接し、面積は146km²と広大な林野を占める地域。上打波、下打波、東勝原、西勝原の4集落からなっている。

○実施主体

五箇地区むらづくり推進協議会



2 現状と課題

地区内には、スキー場（現在は閉鎖）やキャンプ場のアウト・ドア・レジャー施設が整備されるとともに、景勝地「刈込池」や「仏御前の滝」、九頭竜川の「魚止め」等、風光明媚な景色が点在しており、訪れる旅行者を目的とした民宿業も盛んに行われていた（現在は1軒が営業）。

かつては、小・中学校やJAの支所も置かれていたが、相次ぐ災害やダム建設の移住によ

る人口減少や各組織の再編計画の中で、順次役目を終え廃止されていった。



現在は、JR勝原駅のある西勝原区を中心に、東勝原・上打波・下打波の4集落に36世帯65名が生活をしている。また、無雪期には、何人もの村人が市街地から畑や山仕事のため通ってきており、神社では祭りも催されるなどしているが、通年在住者のうち65歳以上が42名を数え、高齢化率（65歳以上の高齢者人口が総人口に占める割合）の進行が64.6%と顕著であり、いわゆる“限界



集落”となっている。2007年に国土交通省から公表された限界集落の実態によると、全国には7,878ヵ所もの限界集落が存在し、今後さらに増加すると記されている。過疎の問題が言われて久しいが、当地区は市街地からも遠いこともあり、その解決策を見いだせないまま人口流失が続き、少子高齢化社会が到来してしまった。

このような中、地区内では、むらづくり推進協議会が実施する「花いっぱい運動」により、JR勝原駅周辺を季節の花で飾り、五箇地区への訪問者を出迎えたり、近所の婦人に



よって30年ほど前から植樹された花桃並木が、春になると“桃源郷”として注目を集め、



満開の季節には遠く中京や関西から観光客が訪れるまでになるなど、「豊かな自然を活かした交流」を目指して、地区住民が一体となり“ふるさと五箇”の活性化に向けて取り組ん

でいるところである。

3 事業の内容

今では雑草が生い茂り、埋もれかけている湧水地や不法投棄されたゴミに汚された用水路に階段や遊歩道を設け、来訪者が清流を楽しめる親水空間として再生するほか、“桃源郷”と表現される花桃並木を核に、地区全体に花が咲き誇る花木の里づくりを、住民協働による故郷の環境保全と位置付け、「豊かな自然を活かした交流人口の増加」を目指し、地区の活性化につなげていくものである。



【八幡神社下湧水地の再生 (H22)】



【花桃の若木保全 (H22)】

平成23年度には、「赤兎山」や「刈込池」、「秘湯の宿嶋ヶ湯温泉」へ通じるとして、観光客の利用が多い県道沿いに位置する東勝原

区の広場にサルスベリを植樹し、景観の向上を図るとともに、平成22年度に引き続き、花桃やツツジ、ヤマボウシなど約150本の若木の保全活動に取り組むこととした。

4 事業の成果

東勝原区でのサルスベリの植樹については、元来、同地区の壮年会と婦人会からなる睦会が管理をする広場に低木が植樹された経緯があったが、市内でも有数の豪雪地帯であるがゆえに、雪害により折損するなどして成長が阻害されてしまい、やぶ化とともに絶えたことから、3mほどに成長した樹を選定した。

作業は、むらづくり推進協議会会長をはじめ、東勝原区からは、ほぼ全員の3名の住民が顔をそろえ、造園業者の指導により、植え込み場所の穴掘りから始まった。



スコップとツルハシを使っての手作業となったうえに、ティッシュペーパーの箱ほどの石を多数、掘り起こさなければならず、高齢の住民にとっては大変な重労働となったが、堆肥を施した穴に樹を定着させ、鳥居に固定する最終作業の頃には、満面の笑顔で、花をつける頃を待ち望んでの話に花が咲くこととなった。

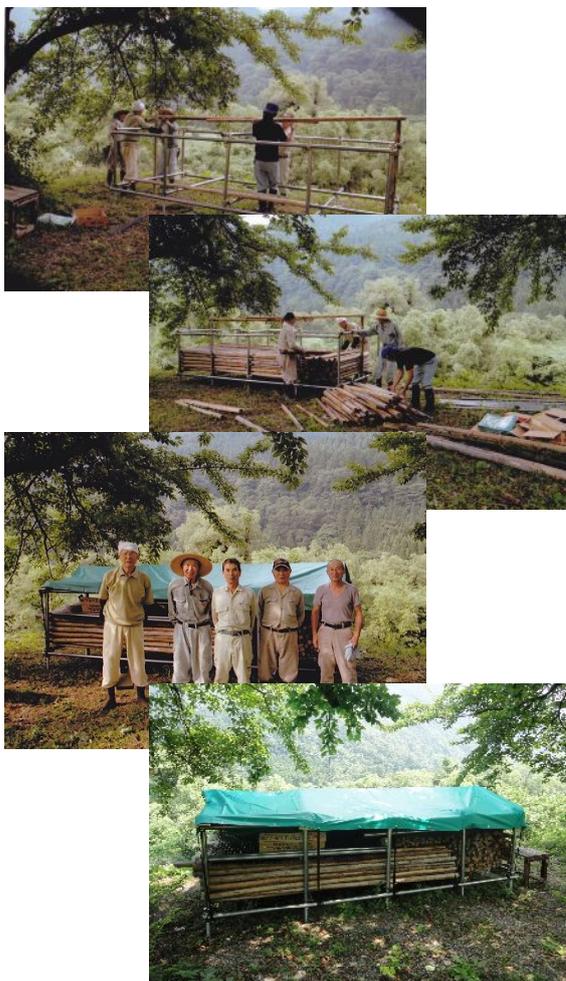


8月には、紅の濃淡が美しい花が咲き、往来する多くの登山客の目を楽しませてくれることを願い作業を終了した。



花桃やツツジ、ヤマボウシなどの若木の管理作業については、雪囲い材料を保管する木棚を組み立てることから始められた。

若木とはいえ、150本分の雪囲い材料ともなると相当の数となり、その保管場所に苦慮していたところであったが、建築現場で見かける足場用の単管を組み上げ、五箇地区の積雪にも耐えられるように頑丈な仕上げとした。



次に、近年、花桃が満開を迎える頃には、近隣の地域はもとより中京や関西方面からでも大勢の観光客が訪れることから、花桃並木に続く園地の整備に取り組みこととした。粉碎した瓦や木片で園路を形成し、散策しやす

い環境を整えるとともに、河川との境界にはロープ柵を施し、安全面にも配慮をした。

平成24年春に花桃イベントの開催へ向けた準備が、地区住民に五箇地区にゆかりのある人を加えた有志により進められていることから、園地の整備は、今後の展開に合致したものとなった。

12月4日（日）には、地区住民総出の冬支度作業に合わせて園地の若木に肥料を施すとともに、雪囲いを行った。好天には恵まれたものの九頭竜川から吹く風は冷たく、本格的な冬の到来が間近と感じられるなかでの作業となったが、こうした共同作業は、本来の目的である若木の保安全管理ばかりではなく、作業の手順や支柱の立て方、荒縄の結び方等、年長者から次世代へ術が受け継がれる機会でもあり、住民同士の結束が深まることを感じられる場ともなった。



5 今後の展望

長い間に埋もれてしまい、地区住民でさえも忘れかけていた財産に、再度、光を当てるとともに、新たに誕生した財産には更に磨きをかける、地区の“宝”づくりがスタートした。

今後は、この“宝”が光り輝き、そして、五箇地区へ人を引き付ける魅力となるように受け継いでいかなければならない。そのためには、むらづくり推進協議会を中心とした、地区住民の手による適切な維持管理が不可欠である。『自分たちの共有の財産』であるという認識と、これを守り育てるという取り組みが、“ふるさと五箇”の活性化となり、交流人口の増加にもつながることと思われる。

幸いにも、住民自らが手弁当によるイベントを企画し、自分たちの“宝”を情報発信する動きが芽生えてもきた。

地区内には、少し手を加えれば再生可能な埋もれた場所が、まだ残っており、これらに手を加え、ひとつの導線として描くことで、昔懐かしい風景に癒される空間を演出し、都市住民に提供できれば、再び、賑わいが創出される。

過疎化が進む五箇地区には、自然がそのまま残されていることが最大の強みである。